

## 体験教育による「学び」について — 小型帆船エコー号等による実習に関連して —

青 木 秀 雄<sup>\*</sup>

### はじめに

明星大学が創立 20 周年を記念して購入した小型帆船エコー号による実習は、1986（昭和 61）年 8 月から故児玉三夫学長の肝煎りで 14 年間続けられた。その目的は、明星学苑と明星大学の建学の趣旨の柱の一つである「体験教育」による「思索と体験の一致」に因み、海という自然に親しみ、集団生活を通して人間性の育成と体力及び技術の向上を図り、通常の体育教科では学ぶことができない大自然の中で波風に耐える逞しい心身を養うとともに、主体的に行動できる実践的な態度を培うことであった。これによって、海洋や船舶に関する科学的な知識と初歩的な技術を身につけられ、さらに帆船を中心とした協働生活という境遇に置かれた彼らが、自然に対する敬虔な精神、的確な判断力、機敏な処置、創意工夫、勇気、協調性、リーダーシップ等、キャンパスでは乏しい M・ボランニーの暗黙知に関連する多くの力を発揮できると考えた<sup>1</sup>。

近年ますます、学生の直接経験の内容が貧弱になってきている。上記の資質能力を育てるには、校内ではできない体験に基づく教育が欠かせない。本学では創立以来、明星学苑の伝統に則り、自分自身で現実問題の解決を図る「実践躬行の体験教育」をモットーに、「思索と体験の一致」の意義が重視されてきた。これは創設者児玉九十学長によれば、J・デューイの経験主義教育論と王陽明の「知行合一」に基づくという<sup>2</sup>。一方、一般的に知識習得における経験と系統の問題は、カリキュラム論や教育方法論等の中心的テーマとして常に問題視されてきた。さらに、児童生徒・学生の「主体的・対話的で深い学び」を獲得させるための、いわゆるアクティブ・ラーニング導入のためのカリキュラム・マネジメント重視は従来大きな課題である。「そこでは、主体的で協調的な探究（反省的思考）を通して、中心的な概念を深く学び、現実世界を生き抜くための[真正の学力]を培うことが重要になってくる」といえる<sup>3</sup>。

管見によれば、大学における帆船実習の教育効果に関する先行研究が散見される<sup>4</sup>。しかし、この帆船エコー号等による実習は、以上のような観点から明星大学にとって重要な教育実践であったにも関わらず、今日まで全く研究対象にされてこなかった。

そこで、14 年間に及ぶ小型帆船エコー号等による実習記録（『明星大学父兄会報』1986～97 年）の記述を比較検討して省察を加えるとともに、これを事例として思索と体験の一致を目指す「体験教育」における実践的学び及びそのカリキュラム等のあり方について論証する。

### 1. 小型帆船エコー号等による実習の年次概要

創立 20 周年を期してミシシッピ州立大学（MSU）と姉妹校協定を締結することとなり、その前年故児玉三夫学長が同大学を訪問された。その際、ミシシッピ川に浮かぶクルーザー（大型ヨット）による教育効果（「体験教育」の実践）に甚く感動された。帰国後間もなく、縁あって作曲家いずみたく氏が来学され、自ら建造した「フォンテー

---

<sup>\*</sup> 教育学部 教授 教育学

ヌⅡ世号」を託したい旨申し出があった。それは「いずみ」をもじった命名だったので、「こだま」ではなく「エコー」とし、早速本学の一般教育体育に「自然コース（ヨット）」として上野直紀教授ご指導のもと、14年にわたり1,121名の学生が受講等して明星建学の精神体得の要の一つとなった<sup>5</sup>。

この実習は、1986（昭和61）年8月から最初の2年間、佐島マリーナ・湘南・相模湾海域で体育実技Ⅱ—自然コース（ヨット）として4泊5日で展開された。その後、1987年4月のいわき明星大学開学の翌年8月、小名浜港・中之作港周辺海域に変更し、体育実技Ⅱ—シーズンコース（帆船クルーザー・エコー号）実習として継続され併せて14年間継続された。

毎年8月に主に3回周期で履修学生を交替し、最初は佐島マリーナ内の施設に、次いでいわき市中之作漁港近くの宿泊施設で学生・教員が共に合宿した。

履修生の選出は、希望者の中から男女差を少なくし、また各学部生が平均するようにしてきた。さらに、より有効な体験活動の成果を期待し、体育系の倶楽部に所属していない者なるべく選出するように努めた。全実習を通じて、ほとんど全ての参加学生が、ヨットに乗船したのは初めてであった。しかしながら、全期間を通じて、船酔いで下船した者、また総合航海を楽しめなかった、最終日受験不参加、ケガ・病気等全て0件で、無事故であった<sup>6</sup>。

履修希望生150余名の中から面接試験により45名（男24、女21）の履修を皮切りに、参加全履修生は868名（年平均68名）を数え、これをサポートしてくれたヨット部員は延べ353名に達した。下表はその年次概要である<sup>7</sup>。

#### 年次概要

回数	年度	コース実施期間	人数(男,女)	主な気象状況	実施海域	使用艇
1	昭和61 (1986)	8/4(月)～8/8(金)	15 (8,7)	台風・快晴	湘南・相模湾 (佐島マリーナ)	エコー号
		8/11(月)～8/15(金)	15 (8,7)	快晴・濃霧		
		8/18(月)～8/22(金)	15 (8,7)	台風・雨・霧		
2	昭和62 (1987)	8/3(月)～8/7(金)	15 (8,7)	台風・雨	同上	エコー号 メイセイ号
		8/10(月)～8/14(金)	15 (8,7)	快晴		
		8/17(月)～8/21(金)	15 (8,7)	快晴		
3	昭和63 (1988)	8/2(火)～8/6(土)	16 (8,8)	快晴	小名派周辺海地 (福島県いわき市)	同上
		8/8(月)～8/12(金)	16 (8,8)	雨		
		8/13(土)～8/17(金)	16 (8,8)	晴		
4	平成元 (1989)	8/1(火)～8/5(土)	30 (15,15)	台風・快晴		エコー号 エコーⅡ世号 メイセイ号
		8/7(月)～8/11(金)	30 (15,15)	濃霧・無風		
		8/12(土)～8/16(水)	15 (8,7)	快晴		
5	平成2 (1990)	7/30(月)～8/4(土)	30 (15,15)	快晴・台風		
		8/6(月)～8/10(金)	30 (15,15)	台風・雨・快晴		
		8/11(土)～8/15(水)	15 (8,7)	濃霧		
6	平成3 (1991)	7/30(火)～8/3(土)	20 (10,10)	快晴・快風		エコーⅡ世号 メイセイ号
		8/5(月)～8/9(金)	20 (10,10)	荒天・強風		
		8/10(土)～8/14(水)	20 (10,10)	荒天・強風		

7	平成4 (1992)	8/3(月)～8/7(金)	30(15, 15)	快晴	小名派周辺海地 (福島県いわき市)	エコーⅡ世号 エコー3世号 メイセイ号
		8/8(土)～8/12(水)	30(15, 15)	台風・雨・快 晴・無風・霧		
		8/13(木)～8/17(月)	30(15, 15)			
8	平成5 (1993)	8/2(月)～8/6(金)	30(15, 15)	雨・曇・晴	小名派周辺海地 (福島県いわき市)	エコーⅡ世号 エコー3世号 メイセイ号
		8/9(月)～8/13(金)	30(15, 15)	強風・雨・晴		
		8/14(土)～8/18(水)	30(15, 15)	強風・曇・雨・ 快晴・微風		
		8/19(木)～8/23(月)	30(15, 15)			
9	平成6 (1994)	8/1(月)～8/5(金)	30(15, 15)	快晴・無風		
		8/8(月)～8/12(金)	30(15, 15)	快晴・微風		
		8/13(土)～8/17(水)	30(15, 15)	快晴・強風		
10	平成7 (1995)	8/1(月)～8/5(金)	30(15, 15)	快晴		
		8/8(月)～8/12(金)	30(15, 15)	快晴		
11	平成8 (1996)	7/28(月)～8/1(金)	30(15, 15)	快晴		
		8/5(月)～8/9(金)	30(15, 15)	雨・曇		
12	平成9 (1997)	7/28(月)～8/1(金)	30(15, 15)	曇・晴		
		8/4(月)～8/8(金)	30(15, 15)	快晴		
13	平成11 (1999)	8/2(月)～8/6(金)	20(12, 8)	快晴		エコー3世号 メイセイ号
14	平成12 (2000)	8/6(月)～8/9(金)	20(15, 5)	曇・晴		

## 2. 指導原理としての体験

### (1) 体験的学習の起源

体験や活動、あるいは遊びの重視は、近代の先駆的な教育思想家たちの賜である。「経験」は、個人と世界の接触面を表わす言葉として使われてきた。アリストレスの「経験に関する考察の出発点」においては、感覚が記憶の中に蓄えられてでき上がる、ある程度一般性をもった萌芽的知識であり、それは「生活経験」に近い。これに対してJ・ロックの経験論においては、ほぼ「感覚知覚」の意味で理解されており、生活経験的な煩雑物をできるだけ排除するという役割が経験概念に与えられた。

コメニウス(J.A. Comenius 1592-1670)は、生活に根を置いた環境において、自ずから体や五感を働かせた学習がなされとし、感覚的美学主義を主張した。またペスタロッチ(J.H. Pestalozzi 1746-1827)は、直観の原理や労作の原理など、人間性の調和的發展を求め、教育が単なる知識の受渡しではなく、「生活が陶冶する」ことを主張した。実生活という体験こそが、知性教育の教材であることを強調したのである。次いでフレーベル(F. Fröbel 1782-1852)は、自発的な子どもの成長を図る恩物を考案し、個性と活動に根ざした幼児教育に力を注いだ。このように、古くから体験や活動の重要性が指摘されてきた。

ルソーの普遍的な考え方は、「生きる」という、生物としての自然の感覚なくしてどうして正しい判断の基礎が築けるか、という問題であった。体験は、実験や観察によって自分の知識の確かさを認識し、確かなものにすることに

留まらない。人間としての知識の基を形成し、自分の判断の根拠を他人に任せるのではなく、自分自身のもつ感覚的な理性に根拠をもたせるために必要不可欠である。体験的学習は、ディルタイの「生の哲学」やケルシェンシュタイナーの「労作教育」に起源をもち、知識伝達に偏した書物主義教育への批判として登場した<sup>8</sup>。

## (2) 体験活動とその意義

戦前の生活実感からかけ離れた知識の獲得に対する批判から、戦後の教育改革では体験活動が奨励された。その後、系統重視の教育観に傾斜したが、1977（昭和52）年の学習指導要領改訂以降、体験活動（学習）という言葉が頻繁に使用されるようになった。

ところで、「経験」と「体験」は、同じような意味合いで日常使われる。しかし「体験」は、個別的主観的な、身をもつての生々しい経験を指す。したがって「体験談」のように印象が強い行為や、「体験入学」というように実地見聞に限定して用いることが多い。これに対して「経験」は、「人生経験」などのように一般的客観的に用いられて範囲が広い。また、「経験者」などと、経験により習得した知識、技能なども含む言葉として用いられる。

体験学習について、『学校教育辞典（教育出版）』は次のように解説する。「学習者が、観察・調査・見学・飼育・勤労などの体験的活動を通して、事実・法則・技術などを習得する学習方法。経験学習と類義語であるが、体験学習のほうが狭義に使われる。両者ともに、人間の認識は感覚的経験によって成立するとする立場にある。」また、『社会科教育指導用語辞典（教育出版）』によると、体験学習は、経験学習と比べて次の2点が強調されるという。①子ども自身の身体的活動に比重がかかる。②子どもの活動の場面や対象が、モデルや模型などではなく、現実に近い。

したがって体験活動は、実際に子どもが五感や身体を使い調べ、観察、追求する、生活共同的経験ということになる。特に特別活動は、集団活動を通して「よりよく生きる」ことを共有し合う仲間との相互交流活動であり、体験活動そのものである。特別活動では、体験活動を通じた問題解決能力や、相互交流に必要なコミュニケーション・スキルやライフ・スキル等の育成に力を注いできた。

体験には、①自然体験（動植物の飼育・観察、キャンプなど）、社会体験（見学、調査、奉仕、勤労など）、生活体験（料理、幼児の世話など）、異文化体験（海外や外国人家での生活・交流など）、歴史体験（土器製作、機織りなど）の直接体験、②模擬体験（ロールプレイングや劇化など）、③疑似体験（シミュレーションゲームなど）、④インターネットや視聴覚機器による間接体験やVR等がある<sup>9</sup>。

現代社会は便利で、物質的には豊かになった。その反面、子どもたちは自分で物事を判断したり、直接自らの働きかけで外界との接触を行ったりするなどの直接体験が不足しがちである。そこで、学校教育を越えた体験の体系化を図り、特に「学びに向かう力・人間性」を育てる改革が社会的に要請されている。

## (3) 体験の意義と実践躬行

環境と主体との関係において、我々は現前する現象を体験する。体験とは、先に触れたように、主体的に周囲の事物や人々と相互行為を行う活動である。同時に、その相互行為を反省し、働きかけと反応との結び付きの意味が発見されることにより、その体験は経験となる。また、特定の意味を使用して体験が導かれることにより、その体験は意図性をもつ経験となる。

J・デューイがいう経験学習とは、経験においてのみ学習は成立するという理念を打ち立てた「行為による学習」(learning by doing) のように、自発的な行動を重視し、直面する体験や具体的諸問題の解決過程で働く思考・判断・表現等や用いられる知識・理解を通して、構成主義即ち自分自身で知識等を構成することにより、はじめて学習が成立するという立場であった<sup>10</sup>。

ところで遊びは、意味の発見や使用を伴わない体験である、と考えてはならない。その他の意味を自由に発見する

ことや使用することに開かれていない学習に比べ、より自由にそれを発見し使用できる活動である。遊びのように自由度や柔軟性が高いほど、その目的とされる意味だけでなく、より豊かな意味を主体的に学び取ることができると共に、学習活動に対する楽しさを生み出せる。すなわち現前する現象との相互行為に対する意欲と自信、さらに体験を主体的に構成していく能力が示される。体験から多様な意味を発見するためには、そのような体験が、豊かな経験として連続的に積み重ねられる必要がある。

一般に「理論と実践」のように、「実践」は、理論・徳目などを自ら実際に行う場合に使われる。一方「実行」は、最も普通に使われるが、倫理的な事柄についてはあまり用いられない。たとえば、「親孝行の実践」に「実行」を用いると不自然な感じになる。また、「社会貢献の実践」は意味があるが、「社会貢献の実行」は意味をなさない。中国の王陽明が唱えた「知行合一」は、知（真の認識）と行（道徳的实践）とは表裏一体であるとの説である。つまり実践とは、よりよき・より優れた達成を目指して行われる活動である<sup>11</sup>。したがって、よさを求めての「実践」は、単なる「勉強」や「労働」ではない。「実践躬行の体験教育」における「実践」とは、自立をめざす成長を伴う実践的学びや「仕事」に通じる。

### 3. 小型帆船エコー号等による実習

この授業担当者は、一貫して上野直紀（一般教養体育）教授であり、今福一寿（現教育学科）教授と著者がサポートする体制で実施された。

このカリキュラムは実習前の学内授業に始まる。ロープワーク、出入港の原則（アンカーリング、係留法）、帆走法、方向転換（タック・ジャイブ）、船位の出し方などの基本的事項を学ぶとともに、特に乗船クルーの心構えについても、たった一人の不注意や単純なミスがクルー全員の命に関わってくること等、事故防止、安全指導、人命尊重の基本を徹底して事前指導する。

1986（昭和61）年の8月4日から8日の最初の実習は、台風通過後の大波の中での操船に始まった。波高とうねりが半端ではなく、教員も身の引き締まる思いで臨んだ。颯爽と格好良く、佐島マリーナにやってきた昨日の学生たちとは裏腹に、絶え間なく大波が打ち寄せる船首で交代の見張り当番、デッキから海に落ちそうになり戸惑いながらのセールの張り、舟艇各部の名称の暗記、航海計器の扱い方などの習得に、真剣そのものになった眼差し。大きく揺れる船内での辛い昼食当番、海図記入、そして初めての苦しい船酔いの体験、やがて宿舎に帰ってからの眠い中での夜間講義等が、不安を感じながらもあっという間に過ぎ、学生だけで操船する総合航海日を迎える。

総合航海前夜、学生たち自ら海図を引き、各通過地点の位置をコンパス、三角定規で記入するとともに、食料の調達を済ませ、3食分の調理準備など航海の準備に忙しい。当日は午前3時半起床、目をこすりながら、うす暗い朝もやの中を初島目指して出航した。視界は200m余りと靄が深く、周りは何も見えない。参加者の声と波の音ばかり。最初、学生間には不安が漂っていたが、全員でタック、ジャイブ等、クルー全員で力を合わせ合図し合いながら黙々と行動する。やがて太陽が顔を出し、海を黄金色に染めはじめると、みんなの顔に感動が走る。快晴となった相模湾を MEISEI UNIV. と染め抜かれた真っ白な帆船は初島へと順調に航海し、佐島マリーナ間を無事帰還した<sup>12</sup>。最終試験は、全員にヨット2艇とモーターボートの操船を課した。したがって、洋上で3艇を接近させ、全員が各々2回にわたって艇を移動した。

このカリキュラム・デザインの基本は、いわば教師とヨット部員が、まず素晴らしい技量を見せて受講生を魅了し、次に実践に参加させるために、予見をひっくりかえして醍醐味を味わわせたり、実践的学びの共同体づくりをしたりする。相当な緊張状況から、人間関係を隔離してきた心的殻が打ち破られ、やがて実践のよさに魅了されることによって、その実践に巻き込まれ、夢中になり、自然にその実践に関わるようになる。さらに習熟してくれば、たとえ厳し

ことや使用することに開かれていない学習に比べ、より自由にそれを発見し使用できる活動である。遊びのように自由度や柔軟性が高いほど、その目的とされる意味だけでなく、より豊かな意味を主体的に学び取ることができると共に、学習活動に対する楽しさを生み出せる。すなわち現前する現象との相互行為に対する意欲と自信、さらに体験を主体的に構成していく能力が示される。体験から多様な意味を発見するためには、そのような体験が、豊かな経験として連続的に積み重ねられる必要がある。

一般に「理論と実践」のように、「実践」は、理論・徳目などを自ら実際に行う場合に使われる。一方「実行」は、最も普通に使われるが、倫理的な事柄についてはあまり用いられない。たとえば、「親孝行の実践」に「実行」を用いると不自然な感じになる。また、「社会貢献の実践」は意味があるが、「社会貢献の実行」は意味をなさない。中国の王陽明が唱えた「知行合一」は、知（真の認識）と行（道徳的实践）とは表裏一体であるとの説である。つまり実践とは、よりよき・より優れた達成を目指して行われる活動である<sup>11</sup>。したがって、よさを求めての「実践」は、単なる「勉強」や「労働」ではない。「実践躬行の体験教育」における「実践」とは、自立をめざす成長を伴う実践的学びや「仕事」に通じる。

### 3. 小型帆船エコー号等による実習

この授業担当者は、一貫して上野直紀（一般教養体育）教授であり、今福一寿（現教育学科）教授と著者がサポートする体制で実施された。

このカリキュラムは実習前の学内授業に始まる。ロープワーク、出入港の原則（アンカーリング、係留法）、帆走法、方向転換（タック・ジャイブ）、船位の出し方などの基本的事項を学ぶとともに、特に乗船クルーの心構えについても、たった一人の不注意や単純なミスがクルー全員の命に関わってくること等、事故防止、安全指導、人命尊重の基本を徹底して事前指導する。

1986（昭和61）年の8月4日から8日の最初の実習は、台風通過後の大波の中での操船に始まった。波高とうねりが半端ではなく、教員も身の引き締まる思いで臨んだ。颯爽と格好良く、佐島マリーナにやってきた昨日の学生たちとは裏腹に、絶え間なく大波が打ち寄せる船首で交代の見張り当番、デッキから海に落ちそうになり戸惑いながらのセールの張り、舟艇各部の名称の暗記、航海計器の扱い方などの習得に、真剣そのものになった眼差し。大きく揺れる船内での辛い昼食当番、海図記入、そして初めての苦しい船酔いの体験、やがて宿舎に帰ってからの眠い中での夜間講義等が、不安を感じながらもあっという間に過ぎ、学生だけで操船する総合航海日を迎える。

総合航海前夜、学生たち自ら海図を引き、各通過地点の位置をコンパス、三角定規で記入するとともに、食料の調達を済ませ、3食分の調理準備など航海の準備に忙しい。当日は午前3時半起床、目をこすりながら、うす暗い朝もやの中を初島目指して出航した。視界は200m余りと靄が深く、周りは何も見えない。参加者の声と波の音ばかり。最初、学生間には不安が漂っていたが、全員でタック、ジャイブ等、クルー全員で力を合わせ合図し合いながら黙々と行動する。やがて太陽が顔を出し、海を黄金色に染めはじめると、みんなの顔に感動が走る。快晴となった相模湾を MEISEI UNIV. と染め抜かれた真っ白な帆船は初島へと順調に航海し、佐島マリーナ間を無事帰還した<sup>12</sup>。最終試験は、全員にヨット2艇とモーターボートの操船を課した。したがって、洋上で3艇を接近させ、全員が各々2回にわたって艇を移動した。

このカリキュラム・デザインの基本は、いわば教師とヨット部員が、まず素晴らしい技量を見せて受講生を魅了し、次に実践に参加させるために、予見をひっくりかえして醍醐味を味わわせたり、実践的学びの共同体づくりをしたりする。相当な緊張状況から、人間関係を隔離してきた心的殻が打ち破られ、やがて実践のよさに魅了されることによって、その実践に巻き込まれ、夢中になり、自然にその実践に関わるようになる。さらに習熟してくれば、たとえ厳し

い訓練であっても必要な教えと自覚し、喜んで受け入れ、学ぼうとする動機は自然に生まれてくる、という方針であった。

このようにして、自然とそれに対する実践による暗黙知等を重視したカリキュラムは、毎回、おおよそ下表のような日程で14日間展開された<sup>13)</sup>。

実習日程表

時	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
1日										昼食	実技	ヨット基礎演習機関 出航前諸点検方法 艤装の方法 格納整備等				夕食	講義・演習	気象 天気図航海日誌 海のマナー習 ロープワーク				
2日					起床 朝食	実技・昼食	離岸・接岸 訓練 帆走法 ・ランニング ・リーチング ・アビーム等				実技	艤装訓練 帆走法 方向転換訓練 格納整備等				夕食	講義・演習	衝突防止法 安全帆走 航路標識 航海計器 航海術等 アマチュア無線				
3日					起床 朝食	実技	艤装訓練 セーリング 海図とコンパス 航海日誌作成				昼食	実技	セーリング訓練 人命救助実演訓練 (食料調達)				夕食	講義・演習	水路図誌 事故防止 国際信号旗 航海計画 回路図作成			
4日		起床	出港	原則的に受講生のみの総合航海実習 操船 見張 チャートワーク 昼食準備作業 昼食 航海計器操作等											夕食	反省会 総合評価						
5日					起床 朝食	総合試験 ロープワーク・操船技術・ チャートワーク・基礎知識						洗艇 格納整備										

#### 4. 小型帆船とモーターボート

帆船「エコー号」は、ロングバラストキールを持つ2本マストのケッチリグで、喫水下の安全性が高く、荒天時の航海には、他の艇種にない優れた性能と操縦性が秘められていた。主要寸法 12.12mx3.96mx1.95m、総トン数 17.28t、定員：近海 10 名・沿海 20 名乗り、外板総檜造、甲板チーク材、船室マホガニーでできており、木造ヨットとしては当時日本で二番目の大きさであった。

エコーⅡ世号は、1987 年（昭和 62）年台湾で建造され、主要寸法 12.95mx4.50mx2.06m、総トン数 12t、バラスト 6.3t、定員：沿海 23 名、近海 11 名、一本マストの気品あふれるスタイルの上、デッキも広く、キャビンはミーティングも楽に出来るほど広い。竣工して間もなく、10 月 1 日に上野直紀教授と学生クルーによって台湾の高雄港を出航し、台風に巻き込まれ悪戦苦闘の連続であったが、10 月 20 日には種子島、23 日に和歌山県の串本港、10 月 28 日午後 11 時に台湾～いわき間の 3 千キロを乗り切り、いわき中之作港に無事入港を果たした。

エコー 3 世号は、1991（平成 3）年に台湾で建造された「エコーⅡ世号」と同型の艇である。「エコー号」の老朽

化に伴い代替ヨットとして取得した。これも上野教授とヨット部学生たちで台湾の高雄港より出航、台風、季節風、強風等の洗礼を受けながら、福島・小名浜港までの3千kmを約1ヶ月かけて無事に回航できた。

船におこる事故は、即人命にかかわるものだけに、小回りの利くモーターボート MEISEI 号（定員12名）を備え万全の体制を整えた。通常帆船では、クルージング中に落水から救助まで、方向転回などに時間を要し、落下地点に到着するまでに20分以上かかる<sup>14</sup>。

## 5. 思索と体験の一致

この実習は、心身一如としての「心の力」等を修養する、明星学苑教育の「実践躬行の体験教育」に基づき、実践的学びの実現のためにPDCAサイクルを重視し、暗黙知等の潜在的カリキュラムを十分配慮してカリキュラム・デザインされた。

英語では経験と体験の区別はない。共に experimence である。また、実験 (experiment) と経験 (experience) の語源は同根である。前者は、14世紀ラテン語 experimentum (試してみること)、後者は同時期の experientia (全うすること) に由来するという。両者共通の語根 peri (試みる) に接頭語 ex (強意) が加わる構成となっている。なお、expert (専門家) は、同時期のラテン語 expertus (経験で得た知識をもった) から、16世紀に「熟達した人」に変化したらしい。

このように、経験科学としての実験と経験、及び経験から得た知識 (科学的知) は、西欧において大変近い言葉である。ニュートン以来の近代科学の方法論は、客観的な立場から観察した経験則による物質の同一性を前提に、その構造を把握することにおいて発展してきた。しかし実際には、宇宙は膨張し時は流れる。この世界の現象は厳密に言えば、すべて無常であって一回起生である。したがって、原理的には客観的現実を記述できない。それが存在しているように思い込んでいるのは、同一性を言葉で表現しているためである。いわゆる客観的な立場は、もとを正せば経験 (現象) によって意識の中で感じられること、すなわち主観的な体験に基づいて抽出されることで成り立っている。現象と経験 (体験) は裏表の関係にある。したがって、外界から取り入れられたものも、自らの精神活動から生成されたものも、我々が意識している以上に本来区別がつかないものである<sup>15</sup>。

二元的世界観の西洋とは異なり、物心一如の東洋の世界観では、もともと世界知 (客観的知識) と経験的生活知は本来一つのものであるとして、その暗黙知は心身を用いる修行のなかで体得できる、と考えられてきた。芸能であれ、武道であれ、稽古による身体的技能の訓練が人格的完成のための修行とみなされた。王陽明と禅体験に影響を受けた、西田哲学における「行為的直観」によれば、世界の事物に対して人間が身体を介して能動的に関係を形成することが「行為」であり、自己は身体にそなわった感性的な「直観」を通して世界の事物の状態を受動的に (無心よって) 了解することができる。この「直観」と「行為」によって、自他の区別がない、超越的な自己が輝く世界に跳び出すことができるという<sup>16</sup>。

近年、禅的な瞑想 (meditation) が欧米でも流行しているが、明星学苑の伝統である「凝念」による心の力を鍛える教育は、瞑想を活用し、心を静かにして自分自身を見つめ直す習慣を身に付ける。「凝念」の合図で、みな吸気を合わせ、気を合わせる。これにより、活動 (授業) 始めには、休み時間等のざわついた雰囲気遮断し、また終わりの「凝念」では内省を習慣づけてきた<sup>17</sup>。

西欧がロゴス (ことば、理性) を重んじるのに対し、東洋の考え方の特徴は修行や修養にある。つまり暗黙知的な真の知は、たんなる理論的思考によっては得られず、体得によってのみ認識できるとする。深い理解は、思考を介して体験 (現象) と言葉 (概念) が結びついたときに生じる。すなわち、「実践躬行による体験教育」において「思索と体験の一致」が可能となる。

## 6. 学習と「学び」の原理

### (1) 苦勞を厭わない「学び」と「学習」の動機づけ

「苦勞を苦と感じさせない」ことや主体的で実践的な学び等の体験がこのヨット実習にはあった。下記の一連の省察がそのことを顕著に物語っている。たとえば、次のような文章がある。

〈略〉後部キャビンへ潜り込むこと三分ぐらいだったろうか？胃の辺りが重苦しくなってゆくを感じた。耐えるに忍びなくなって外へ出た。いわゆる船酔いであった。外へ出ると皆の視線と「大丈夫？」という声が同時に私に向けられた。自分でも情けない、と、思ったのは後のことで、その場はそれどころでは無かった。外へ出て少しは良くなったかなと思ったのも束の間、船酔いは悪化の一途をたどった。最悪の事態であった。船はまだ出たばかりなのである。再び陸に降り立つには三時間以上耐え貫かねばならなかった。〈略〉

多くのことを得た五日間だったと同時に実に、あっけない五日間だった。部やサークルに籍を置いていない私には、一度に14人もの仲間ができたことだけでも大きな収穫だったと思う。その上、若干は船の知識も身に付いた。確かに大きな収穫ではあった。だが何か足りなかったようにも思う。私は、その原因が海が穏やかであったこと、天候に恵まれ過ぎたことにあったような気がする。海には、自然には、もっと厳しい一面があった筈である。それを知ることができなかったのは口惜しい気がする。(若元雅人)<sup>18</sup>

(帰路)エコーⅡ世号に乗船した。この時の大波は船をのみこんでしまうのではないかと恐怖心にかられた。だが、その恐怖心は、後になって感激へと変わっていった。そして、今もそのすごさを忘れることのできない経験となった。〈略〉

大自然の海の上で、私はあまりにも小さい自分の存在に気がついた。そして個人だけでは、生きてゆくことのできないことが分かった。そうしていくには、人々が協力して、自然と互いに共存していかなければならないのでということに気がついた。このヨットでは、全てが勉強になったので受講できて本当によかったと思う。そして他では得ることのできない、貴重な体験ができ、よかったと思っています。(宮入有子)<sup>19</sup>

〈略〉海は本当に何が起こるかわからない。自然の厳しさ、素晴らしさ、ありがたさから教えられたことがいっぱい。「自然と仲良くするんだぞ!」と上野先生が言っていた意味がわかった気がする。そして、これらと接してつくづく自分の「気持ち」のちっぽけさに気がついた。〈略〉洋上作業や食事当番を仲間たちと一緒にやってやることの「チームワーク」の大切さをも発見できたと思う。また、普段の生活ではお目にかかれなくらい沢山の大自然とも仲良くできた。(池田陽子)<sup>20</sup>

これらには「最悪の事態」の末に「あっけない五日間だった」と感じ、「恐怖心は、後になって感謝へ」や「自然の厳しさ、素晴らしさ、ありがたさ」を体験した様子が滲んでいる。

ところで、放っておいても学習する、勉強好きの子は稀である。そこで動機づけが必要になる。その代表的なものが賞罰の利用である。褒める・叱る方法、点数や偏差値で他者や過去の自分自身と競わせる、進学先・就職先・社会的資格・経済的境遇・社会的地位や名誉等に関して学習することのメリットを示すやり方など多種多様に存在する。

しかし、これら賞罰の利用は、外側から学習をコントロールする点で、自立を目指す教育にとって原理的に相応しくない。そこで、内側からの動機づけが目標になる。つまり、学習を楽しむことによって達成感や成功感や有能感を味わったり、学習内容がもつ社会的有用性を知ったり、また学習内容を将来の目標や夢と関係づけることなどである。

このように、動機づけは、学習をさせようという意図をもって仕組まれることを前提とする。つまり、動機づけようとする意図と、その実現を目的として仕組まれた教育的装置を必要とする。しかし、近代学校教育制度が成立する以前には、こうした意図や装置がないにもかかわらず、人々は学び続けていたのである<sup>21</sup>。

## (2)「学習」の起原

近代国民国家においては、「善良な国民」や「勤勉な労働者」といった人間像を目指して「人材」を育成することが急務であった。しかし、既存の実践の中で、自然に生まれる実践的学びに任せていてはそうした人材は育成できない。そこで、新たに「学習」が必要になった。しかし、「学習」は自然には起こらないからこそ、学習への動機づけも必要になる。

このように「学習」は、他人の知や行動、性格を合理的にコントロールしようとする関心に支えられている。学習の効率や能率を高めたり、教育の生産性を向上させたりすることが関心事になるとき、動機づけは、単に必要なものから積極的に押し進めるべきものとなる。その結果、子どもたちは学習動機を内面化し、主体的・自発的に学習しているかに見える。しかし、外的動機づけによって生まれる学習は矛盾でしかない。よって動機づけは、「学習」を促すことを通して「学び」を損なう傾向をもつ。「学習」の領域が肥大化して実践的学びの領域が縮小するとき、人間は自らの自律性や自由を奪われてしまう。

いみじくも70年代に、イリイチが警鐘を鳴らした「学校化された社会」の問題である。『脱学校化の社会』において彼は、近代的な学校制度の充実によって、今や社会全体が「学校化」されてしまった。そこから脱出しなければならない、と警告した。「学校化された社会」では、教授されることと学習することとを混同するようになる。「想像力も『学校化』されて、価値の代わりに制度によるサービスを受け入れるようになる。医者から治療を受けさえすれば、健康に注意しているかのように誤解し」てしまう。生きるための「学び」や健康の維持は、主体的な行為であるにもかかわらず、学校や病院に従属したものになり、人々の自立が奪われてしまう、と喝破した<sup>22</sup>。

しかも、動機づけに支えられた学習は極めてもろい。学習の辛さに見合う代償が得られなかったり、学習が楽しくなかったり、学習する内容が社会で役立つものでなかったりした場合、学習はあっさりと拒否されてしまう。さらに、仮に動機づけが成功したところで、動機づけが向かわせようとしていた内容以外の学習は、冷酷に切り捨てられてしまう。つまり、異なる文化との出会いは、「学び」にとっては自己を豊かにしてくれるものになり得る。しかし、「学習」にとってはそもそも関係のないことなのだ。

## (3) 共に仕事をする中での「学び」

近代公教育制度が誕生する以前は、家族や地域共同体の人々と共に生活し仕事をする中で、文化（知識や技術）を習得し、知恵を身につけ、その人らしい性格を築き上げてきた。自分なりに先人を模倣し、仕事に慣れ親しんで習熟することが「学ぶ」ということの基本であった。

「学ぶ」とは模倣することであった。わずかな無意識の振る舞いでさえ模倣されると、人と人のつながりを強化する社会的な接着剤として働く。真似た人に対しポジティブな感情が湧く、いわゆる社会心理学ではいうカメレオン効果である。伝統的な「修業」は、世襲制や徒弟制度の下で、親や親方に親近感を覚えつつ、幼少時からよきモデルを長い時間をかけてじっくり観察し、鑑識眼を高め、そのよさを理解して行く過程であった。さらに、親・親方・師匠などの振る舞いや仕事を手本に、新しい知識や技術を自分自身で編みだしていくことでもあった。つまり模倣は、単に手本と同じ行動をとるのではなく、独自の工夫によってそれに新たな意味づけをし、自分自身の境地を切り拓いて行くことであった。なぜなら、具体的な指導はほとんどなされなかったからである<sup>23</sup>。

伝統的な学びの手法としての「まねる」「型から入る」「反復する」などは、創造性や個性や精神的自由と両立していた。

そこでは、創造性・個性・自由と規律・秩序・ルールのような近代教育特有の二項対立は存在しなかった。したがって、「修業」の一環として先人を模倣する中で、自分なりの世界の見方が築かれ、同時に自分や自分の仕事に対して誇りをもつ個性的な人格ができ上がった<sup>24</sup>。

ヨット実習においても、下記のように困難な状況下で、共に仕事をする中での自己効力感に裏打ちされた実践的学びが生成された。

〈略〉たった四泊五日のこの授業の中で、私が、見て、聞いて、体験したことは、私が今までに経験したことのないことばかり、知らなかったことばかりでした。〈略〉

私がこのコースを終え、とても不思議に思ったことがあります。それは、なぜかみんなが仲良しになってしまったことです。学校は同じでも、学部も学科も異なり、顔を合わせてしゃべったこともないような人達が集まったにもかかわらず、いつしか、まるで昔から知り合いだったように、しゃべりながら笑いあっていたのです。まるで、一つの家族のようだったのです。〈略〉誰かが船酔いで苦しい時は、その人の分の仕事を、みんなでカバーしたり、励ましたり。とにかく助け合い、そして楽しい時もまた、みんなで大声で笑い、楽しむことができました。(高瀬いづみ)<sup>25</sup>

〈略〉きついと思っていたジョギング、朝六時の起床、食事当番も掃除も今思えば「なんて楽だったんだろう。」とさえ感じます。同じ班の人や、同室の人と顔を合わせるのが大好きになって、毎日が充実していました。〈略〉ヨットを受講して得をしたことはたくさんありますが、その中でも群を抜いて“友達が増えたこと”でしょう。同じ敷地内ですれ違っていた人と顔見知りになり、挨拶を交わすようになったのはとても嬉しいことです。共に苦難を乗り越えた仲間なので、これからも是非交流したいです。〈略〉(小田倫子)<sup>26</sup>

## 7. 「学び」の基盤としての実践の論理

### (1) 「実践」に内在するよさ

誰からも動機づけられないのに、なぜ自ら先人を模倣しようなどという気になるのか。その人にとって、単なる活動ではない「実践」だからである。辞書によれば「実践」とは、①「主義・理論などを実際に自分で行うこと。②「哲学で、ア 人間の倫理的行為。アリストテレスの用法で、カントなどもこの意味で用いる」(『大辞泉』)とある。この②のアの定義に関連して『日本国語大辞典』によると、「人間が行動によって周囲の世界に働きかけて環境を意識的に変化させること」である。つまり、環境に働きかけ、現実をよりよく変えようとすることにより、自分も変わって(成長)いく。先人の活動は「よき活動」であるがゆえに、「自分もそうになりたい」と思わせるモデルなのである。

ここでいう実践とは、各々の実践に内在する固有の「よさ」の達成を目指し、あるいはその内的美に照らして判定される、より優れた達成を目指して行われる活動のことである。たとえばこの意味で、研究や学問などの理論的活動も当然「実践」である。

この内的美が具体的に何であるかは、直接知ることができない暗黙知である。それは実践を共有する人々に暗黙の規準としてシェアされる。したがって、自ら実践に参加しなければ会得できない。優れた実践の例示は可能であるから、それに数多く触れたり、それについて会話・議論したりすることによって、自ら内的美を構成して行く。これを共有する実践共同体に参加する過程で、よく生きるための智慧として必然的に伴うのが実践的学びである<sup>27</sup>。

## (2) 実践のよさに魅了させる

江戸時代まで日本では、『論語』にある「不憤不啓 不悱発」（憤セズンバ啓セズ 悱セズンバ発セズ）が学びの条件であった。すなわち、胸一杯になってやっきにならなければ目を見開いてやらない、いらだって「発憤」しなければ「啓発」しない、という「学び」の渴望が前提だった。

そこで、今日これを生かすには、教師はまず、素晴らしい技量を見せて魅了し、その目標に到達するためにすべきことを想像させる。次に、実践に参加させるために、例えば数学や物理学であれば、数の世界や時空間の不思議さを味わわせたり、簡潔で美しい解法を目指して問題解決の試行錯誤を経験させたりする。文学や歴史学であれば、文章・作品や歴史的事件・現象をめぐる解釈の優秀性を競わせたり、常識や予見をひっくりかえすなどして、研究することの醍醐味を味わわせたりしなければならない<sup>28</sup>。

その中で子どもたちが、実践のよさに魅了されることによって、その実践に巻き込まれ、夢中になり、好きになれば、彼らは自然にその実践に関わるようになる。さらに習熟してくれば、学ぼうとする動機は自然に生まれてくる。もちろん、「学び」を独りよがりの世界に閉塞させないためには、他者の文化活動の優れた成果から学ぶことが不可欠である。そのためには、自覚的な教えも必要になる。だが、学ぶ姿勢をすでに身につけていれば、スポーツのように厳しい訓練であっても、必要な教えと自覚したなら喜んで受け入れるようになる。

さらに、構成主義に基づいた授業のデザイン化を推し進めること。つまり、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためのアクティブ・ラーニングを積極的に導入し、「思考・判断・表現力」等に加え「学びに向かう力・人間性」を養うためには、本論のような「実践」に基づき、教育内容と教育活動に必要な人的・物的リソース等を外部資源も含めて効果的な活用を図るカリキュラム・マネジメントが必要である。

ヨット実習においては、上記観点からカリキュラムを組んだ。この成果は、下記の体験記からも窺われよう。

〈略〉何よりも心を動かされた事は、ヨット部の人達の動きでした。荒れる海の上でマストに乗りセールをたたんでいる姿や、エンジントラブルにより船が動かなくなった時の配慮などどれを取っても、体力、忍耐、緊張感を必要としたきびしいものでした。自分も四日後には船を動かさなければならぬ。そんな事が実際本当にできるのか、不安だけが残った気がします。それからというもの、合宿は足早に過ぎていきました。〈略〉それぞれが、個々のパートを自信を持ってこなさない限り、操船は不可能であるというのが身にしみて痛感できました。自然、海の雄大さに改めて魅せられた気がします。そしてもう一つ。団結力。十人ならば、十人皆が同じ気持ちでヨットに挑む事。それがどんなに重要で難しいか、この合宿を通して分った気がします。この合宿を通じて友人も多くできました。もともと知り合いであった友人とは、よりいっそう親密になり、しかもヨットをすることでさらに友情が深まったことに大変満足しています。〈略〉（秋山理恵）<sup>29</sup>

〈略〉タックの際の行動が遅くて、やり方がわからなくてハラハラの連続あったけど、風をどのくらいどちらから受けているのか、感じながらクルージングするのは何ともいえない快いものでした。操船、フライングのカットマン・ウインチマン、スピンのアップ、セールのたたみ方、ハイクアウトなど一度も行ったことのないことばかり行ってみて、「ヨットをみんなの一人一人の役割・力が動かしている」と感動した。自然の風・波とのかげひきが難しく、操船で先生に注意されながらも、「出港・入港」を体験した。カットマンなども責任はあるが、船長は特に重い責任があって、特に大きな声で、風と波にラダーをとられながらも、ヨットを動かしたのでした。〈略〉（橋本めぐみ）<sup>30</sup>

### (3) メタ認知能力と鑑識眼

ところが、目の前によき「実践」の手本があっても、もし自分の実践に満足していると、それを模倣しようとする動機は生まれない。したがって「学び」のためには、よりよき仕事の存在が認識でき、自分の実践がまだそこに到達していないことの自覚が不可欠である。自らの実践を省みて、そこに乗り越えるべき、改善すべき余地、新たな課題等を見つけ出すこと、すなわち実践についての省察が「学び」を促す。

そこで重要なことは、失敗を生かす、優れたメタ認知能力と鑑識眼をもつことである。鑑識眼による判断とは、今日の評価のように、一定の基準を満たしているか否かを測定することではない。それは対象の多様な側面を同時に目配りし、それぞれの側面の相互関係にも注意を払いつつ、それら全体を評価する。対象を多義的あるいは複眼的に評価する。

そのため、優れた鑑識眼をもっている人は、必ずしも手本を必要としない。手本となるモデルがないにもかかわらず、よりよきものを求めて実践が行われてきたからこそ、新しい知識や技が生み出されてくる。つまり「学び」は、「学習」とは異なり、目的や目標とする地点を必ずしも必要としない。したがって実践的学びには終わりも完成もない<sup>31</sup>。

### (4) 結果責任を引き受ける力量と悦び

省察によって、自らの実践が問題を抱えていることがわかったとしても、その問題をあえて引き受けるのでなければ、さらなる実践は呼び起こされない。だが幸いなことに、実践に従事することにより、問題を引き受けるという態度も自然に育ってくる。

学校での学習は、子どもの目標到達が容易かつ効果的になるように、教師が合理的に設計した教育課程に沿って行われる。つまり、子ども以外の者によって、教材・教具が計画的に選別され、配置された状況で行われる。そのために、学習に問題が生じた場合、子ども自身ではなく、教師や教育関係者が問題の責任を引き受けなければならなくなる。

一方、実践においては、自らが為したことの結果をめぐって、利害関係にある人びとだけでなく、実践の内的よさを共有し、発展に貢献してきた実践共同体の先達に対して、またその実践に固有のよさの探究者としてアイデンティティをもっている自分自身に対しても、自ら責任を引き受けることが倫理的な責務となる<sup>32</sup>。

5日という短い期間ではあるが、このような責任感の萌芽が下記のようにしばしば垣間見られる。

〈略〉ヨット実習には、現代の教育に欠けたものが充実していて、新鮮さと自由があり、冒険心を大いに満足させてくれる場がありました。〈略〉

いつも船は揺れているので、船上を歩くとき投げ出されないように狭い足場を一步一步何かに捕まりながら歩くのです。セイルを張る時も指を挟むこと等、何をするにも思わぬ事故が起こる危険性は常に伴っていました。しかしこのような環境であったからこそ、自由の中にも責任ある行動をしなければいけないと自覚させられたのだと思います。怪我をするのは本人の不注意からくるものですし、特に船上でのことですからおさら限られた人、物の中でうまくやっていく必要性は大きくなります。私はここで“宇宙船「地球号」”の意味を感じざるを得ませんでした。

四日目に総合航海として静岡県の初島まで航海しました。航海の途中、船の位置確認のための NNSS という装置の INPUT ミスで使えなくなり、操船もふらふらで航路からどんどん離れていくような気がしました。周りに陸地は見えず本当にこれで島に着くのかと不安でならなかったのですが、「島が見えたぞ!」の声に、船室にいた人も外に出てきて前方に横たわる島を見て皆で喜び合いました。(内田知江)<sup>33</sup>

〈略〉海の上ということもあり、少しの不注意が事故や死に繋がります。そのためか日数がたつに従って、“怖さ”

というものの持つ意味が変化していったように思います。やはり自然には逆らうことは出来ないし、自然の中で人間はとても小さいもののだとも感じました。〈略〉助けたり、助けてもらったりと、久しぶりに味わう感動でした。考えてみれば、一生懸命動きながら、他の人を思いやって共に行動するなんて、大学生になってから初めてのよう to 思います。一年半の間、だんだん“人を思いやる”ということを忘れてきていた私は、周囲の人達にたくさんの思いやりを貰って、一年半のことを深く反省することが出来ました。〈略〉(引地真弓)<sup>34</sup>

また実践には、よきものを自分自身の力で生み出す喜びを伴う。その美的な喜びは、鑑識眼と深く結びついているので、その確立とともに深まっていく。実践は、今を喜びとするという側面をもっている点で、労働や学習とは異なる。現在の生活を、将来のための単なる手段に矮小化することはないし、余暇や遊びによって苦痛を癒すことを必ずしも必要としない。そもそも実践の中では、仕事と遊びの境界がはっきりしない<sup>35</sup>。

実践においては、内的よさの達成をめぐる他者との競争もあるが、仮に他者との競争がなくても、美的喜びというような報酬に促されることによって、よりよきものの実現を目指し、自己という殻を破りつつ、終わりのなき実践、すなわち「学び」が続けられる。本来の「学び」とは、単に知識を得ることではなく、それを介して自らの生きることの意味とその可能性を見出すことなのである。

## おわりに

すべてが自然との戦いである。無風、強風、風向きなど刻々と変化する海象といつも対面する。一度海が荒れれば、全身全霊で対応せざるを得ない。そこから自然への畏敬と適応力等の暗黙知を身につけたシーマンシップが生まれる。このような「実践」が、すぐれて「学び」への動機、意欲、創造性や協働と自律等を生み出す恰好の事例として、14年間に及ぶヨット実習の様々な体験記録を比較検討し、「体験教育」における実践的学びとそのカリキュラム等の意義とあり方について考察した。

大学(学校)教育において、思索と体験の一致を目指す「体験教育」を基盤に、学ぶ動機を自然に生み出し、意欲的・主体的に、いわゆる「精進」できる実践的カリキュラムを継続して重視していかなければならない。その融合により、児童生徒・学生の「主体的・対話的で深い学び」を獲得させるための、いわゆるアクティブ・ラーニングの推進にもこれは大いに貢献しよう。

小論で考察したように、「学習」カリキュラムにおいては、学習活動が教育目標によって統制され、目標に無関係なことは学習から排除される傾向がある。しかし、実践的学びのそれにおいては、何がよい仕事か、出来栄が優れているとはどういうことかについて理解し鑑識眼を高めるために、自主的に活動が選択され配列される。伝統的な社会において「修業」と呼ばれた「学び」は、先人の使う道具を運んだり、道具の手入れをしたりといった段階や、道具を一つひとつ使用してみたり、担える仕事の部分を一つひとつ広げていったりと、段階を経て行われた。つまり、「実践」とは、「各人が身をもってする決断と選択を通じて、隠された諸相を引き出すこと」である<sup>36</sup>。これは周辺的な活動から中心的な活動へと実践(仕事)に習熟していく過程であるが、同時によきモデルをじっくりと観察し評価したり、優れた技を盗んだりする機会を、各段階に相応しいやり方で確保することによって、よりよい実践を目指して鑑識眼を高めていくという潜在的カリキュラムが働く過程でもある。

〈略〉さっきまで遠くの方にうっすら見えていた岸や港が全然見えないではありませんか。その霧のたちこめる時間の早いこと、早いこと。またたく間に私たちは濃い霧に包まれ、身動きがとれなくなっていました。〈略〉私はただただ恐怖におののいていました。〈略〉一歩まちがえば、人の命はもちろん、自分の命や責任問題まで

かかっているというのに、私たちのような、ズブのド素人にもわけへだてなくいろんなことをやらせてくれる。実に危険を伴うけれども、見るよりも聞くより、なにより自分の体でやらせてもらえることによって非常に大きな体験をします。〈略〉(畠山淳子)<sup>37</sup>

紙幅の都合上資料の多くを割愛したが、小型帆船エコー号等による実習記録の記述には、危険をヒシヒシと痛感する中での懸命な気ばたらきとが、毎年様々な状況で行われていたことが散見され、各自の運命共同体とでもいえるような事態が記されている。このような体験から、様々な状況において必要な行動を効果的に遂行できるという自己効力感が養われたといえよう<sup>38</sup>。その裏に、危機意識をもって困難に立ち向かい、力を合わせ克服する状況に追い込まれた体験がほとんどないままに学生になった背景が窺える。以上を更に明らかにするために、比較対照群をもった論考等により本論の研究デザインの弱さを補う必要がある。

授業担当の3人にとって、大仰に言えば命を懸けた授業の展開であったが、この体験をした他学部他学科同士の彼らが、後期授業が始まったとき、キャンパスのあちこちで楽しそうに群れる姿を見るのが楽しみであった。本論の最後に引用した「一生懸命動きながら、他の人を思いやって共に行動するなんて、大学生になってから初めてのように思います」(引地真子)とあるように、いわば戦友のように、身を挺して協働し合い、共に大きな困難を克服した体験は、各々の心の殻を打ち破り、強い絆で結ばれることを痛感した。

なお、これからのIoT時代は、暗記させるための学習意欲喚起に汲々とするのではなく、自ら課題を見つけて解決を図る、自立して社会を支える人材育成がますます求められる。したがって、よさを求め続ける生き方を生成する「実践躬行」を原理的に大いに盛り込んだ「体験教育」実現のためには、PDCAサイクルと人的・物的リソース等を効果的に備えたカリキュラム・マネジメントによる授業デザイン改革が一層重要になろう。

## 【註】

- 1 上野直紀 1995, 11 “ヨット授業” 十年目に想う 明星大学理工・人文学部父兄会報 N0.93 p.112  
上野直紀 1997, 11 航跡 (メインセールをあげて) 同前 N0.101 p.97
- 2 児玉九十 1965 この道五十年 (喜寿記念) 明星大学編集委員会 p.3, pp.45-6, pp.51-2, pp.670-1  
児玉九十編纂委員会 1990 児玉九十伝 明星大学出版部 pp.214-5
- 3 松尾知明 2016 知識社会とコンピテンシー概念を考える— OECD 国際教育指標 (LNES) 事業における理論的展開を中心に 教育学研究 Vol.8, No.2 p.163
- 4 大学教育における帆船実習による教育効果に関する先行研究には下記等がある。  
国枝佳明・猪俣活人 2012 帆船の訓練効果に関する研究 (資質訓練の効果) 海洋人間学雑誌 1 (1) PP.1-20  
久保和之・谷健二・福田芳則・吉田嗣治・片岡直樹 2003 ウォーターワイズプログラム参加者における自己効力感の変容, 青少年教育フォーラム 3 pp.139-144  
渡壁史子・橋本公雄・徳永幹雄・柳敏晴・西田順一 2000 海洋体験学習による一般性自己効力への効果とその要因について 日本スポーツ心理学会 第27回大会研究発表抄録集 pp.46-47  
行平真也 2015 海洋教育としての乗船実習の教育効果に関する研究 大分県農林水産研究指導センター研究報告 (水産研究部編) 第5号 pp.37-81  
井澤悠樹・夏名が敬子 2009 マリン&レクリエーション実習のプログラム効果に関する研究—学生の Self-efficacy に注目して 大阪女学院大学紀要 6号 pp.97-106  
千足耕一・蓬郷尚代 水辺の自然体験活動および海洋教育の教育的効果 平成24年度「海辺の自然体験学習の

教育的効果」に関する共同研究総説論文 ヤマハ発動機スポーツ振興財団（海洋教育関連）

守下奈美子 2006 実習生が捉えるシーマンシップとは—シーマンシップの意味構造の把握とキャラクターエデュケーション要素の抽出 日本航海学会論文集 114 pp.229-234

野口和行・村山光義・村松憲・板垣悦子・東海林祐子 2015 実技受講生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討—授業形態の違いによる比較 慶応義塾大学体育研究所紀要 Vol.54 No.1 pp.9-16

池畑亜由美・長谷川望・鈴木大地 2003 海浜実習における状態不安と自尊感情の変化 日本野外教育学会 第6回大会 プログラム 研究発表抄録集 pp.73-74

5 上野直紀 1994, 11 ヨット授業を担当して 同前 N0.89 pp.67-9

6 上野直紀 1992, 2 エコー号からエコー3号へバトンタッチ 同前 N0.79 pp.85-8

7 上野直紀 1994, 11 ヨット授業を担当して 前掲 p.69 の表に、上野直紀氏が加筆したもの。

8 拙著編 2013 教職実践演習—磨きあい高めあい続ける熱意ある教師に 明星大学出版 pp.200-1

9 同前 p.202

なお、大学教育における野外活動には次の効果が期待できるという。①感性や知的好奇心を育む、②自然の理解を深める、③創造性や向上心、物を大切にすることを育てる、④生きぬく為の力を育てる、⑤自主性や協調性、社会性を育てる、⑥直接体験から学ぶ、⑦自己を発見し、余暇活動の楽しみ方を学ぶ、⑧心身をリフレッシュし、健康・体力を維持増進するなど。下記等の先行研究によってその教育的効果が報告されている。

甲斐知彦・佐藤博信・河鱈一彦・林直也 2007 キャンプ集中授業における学生の変化—自己概念の変化について スポーツ科学・健康科学研究 Vol.10 pp.9-14

吉田充 2007 キャンプ体験が短期大学生の自尊感情と社会的スキルに与える影響 國學院短期大学紀要 Vol.24 pp.3-14

築山泰典・神野賢治・田中忠 2008 大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討 福岡大学スポーツ科学研究 Vol.39 pp.13-26

千足耕一・蓬郷尚代 前掲 平成24年度共同研究総説論文

10 苫野一徳 2011 どのような教育が「よい」教育か 講談社 p.184

11 佐伯胖監修・渡部信一編 2010「学び」の認知科学事典 大修館書店 p.34

12 上野直紀 1986, 11 自然コース（帆船クルーザー・エコー号）実習を終って 前掲 N0.79-81 p.57

上野直紀 1997, 11 前掲 N0.101 p.97-9

13 上野直紀 1994, 11 前掲 p.69

上野直紀 1995, 11 前掲 pp.113

14 上野直紀 1992, 2 前掲 pp.85-8

上野直紀 1998, 11 “ヨット授業”十二年目に思う 前掲 N0.105 pp.86-7

15 拙著 2017 教育学—人間科学からの展望 明星大学出版部 第10章

16 湯浅泰雄 1999 日本人の主教意識 講談社

17 児玉九十 前掲 pp.47-8 児玉九十編纂委員会 前掲 pp.218-9 編纂委員会 2007 学天の明星を目指して—あなたはどのように生きるか 明星大学出版部 p.133

18 若元雅人（物理学科二年）1987, 11 自然コース五日間の体験 前掲 N0.61 pp.103-5

19 宮入有子（教育学専修二年）1992, 2 ヨットで学んだこと 前掲 p.104

20 池田陽子（英語英文学科二年）1991, 11 ありがとう、ヨット、多くの自然を知ることができて 前掲 N0.77 p.90

21 松下良平 2000 自生する学び—動機づけを必要としないカリキュラム グループ・ディダクティカ編 学びのための

カリキュラム論 勁草書房 pp241-2

- 22 イヴァン・イリッチ 東洋・小澤周三訳 1977 脱学校化の社会 東京創元社 p.13-5
- 23 野村幸正 2003 「教えない」教育—徒弟教育から学びのあり方を考える 二瓶社 p.124-131
- 24 辻本雅史 1999 「学び」の復権—模倣と習熟 角川書店 pp.158-168
- 25 高瀬いづみ（教育学専修二年）1986, 11 自然コースに参加して 前掲 NO.57 p.86-7
- 26 小田倫子（心理学専修年二年）1991, 11 ヨット授業バンザイ！ 前掲 NO.77 P.97
- 27 佐伯胖監修・渡部信一編 前掲 pp.34-5
- 28 松下良平 前掲 p.246
- 29 秋山理恵（心理学専修二年）1992, 11 ヨット合宿を終えて 前掲 NO.81 p.102
- 30 橋本めぐみ（社会学科二年）1998, 11 ヨット授業に参加して 前掲 NO.105 p.95
- 31 佐伯胖監修・渡部信一編 前掲 p.36
- 32 松下良平 前掲 p.246
- 33 内田知江（社会学科二年）1987, 11 ヨットの実習で考えたこと 前掲 NO.61 p.106
- 34 引地真弓（心理学専修二年）1993, 11 意味ぶかった五日間 前掲 NO.85 p.115-6
- 35 松下良平 前掲 p.246
- 36 野村幸正 前掲 p.166
- 37 畠山淳子（教育学専修二年）1990, 11 忘れられない思い出 前掲 NO.73 p.86
- 38 一般性自己効力感が向上した結果を得た研究として、海洋体験学習に参加した大学生 247 名を対象にした調査（渡壁史子・橋本公雄・徳永幹雄・柳敏晴・西田順一 前掲）や、日本版ウォーターウイズを体験した小学 5 年生 147 名を対象として、一般性自己効力感尺度を用いた調査報告（久保和之・谷健二・福田芳則・吉田嗣治・片岡直樹 前掲）等がある。なお、一般教養教育としての 4 泊 5 日の乗船実習における教育効果の研究（行平真也 前掲）において、参加学生 78 名に質問紙法を用い、「協調性」「忍耐と責任感」「積極性」を習得したことが確認され、「不慣れな環境（揺れる、船酔いする、狭い空間）に身を置くことで、仲間と助け合い、協調し、協力の大切さを学ぶこと、規則正しい生活の中で団体行動の修養が図られることが示唆された」としている。